

ハワイの日系宗教 (2)

5. 離村向都時代：1920～30年代

1910年代に入ると、サトウキビ・プランテーションで就労していた日本人の中で、より良い生活環境をもとめて都市へ移住するものが増えていった。また新たな労働力としてフィリピン人がハワイに入ってくるようになり、1920年代には耕地労働者人口で1位を占めるようになった。1907年の日米紳士協定により日本人渡航が厳しくなり、1924年移民法で新たな移民が禁止されていく中で、妻や家族を呼び寄せ都市へ定住する傾向が強まっていった。またハワイで生まれた子供たちはアメリカ式の教育を受けることになり、現地社会への関わりも深まっていった。このような日系社会における変化は、宗教界にも大きく影響をおよぼすことになった。

仏教の中で最大勢力であった本派本願寺では今村恵猛の指導の下、キリスト教的な礼拝様式を採用し、イギリス人僧侶アーネスト・ハントによる英語での布教を実施するなど、現実的なアメリカ化を推進していった。また同時に日本の民族宗教としてではなく世界宗教としての仏教というイメージ形成も図られた。一方、神社も日系社会において不可欠な存在であると考えられ、特に1930年代は各神社とも盛況であった。出雲大社布哇分院は「結婚式なら出雲大社」と言われ、1931年当時、約1万数千人の氏子を数えたときれる(井上1985、63頁)。

またこの時期には、仏教や神道などの伝統宗教だけでなく、新宗教とされる教団がハワイ諸島で活動を開始したことが一つの特徴として挙げられる。金光教と天理教は1929年ホノルルにそれぞれ教会を設立し、また生長の家は1935年頃から組織的な活動を開始している。

6. 太平洋戦争時代：1941年～1945年

日系社会の発展に伴い着実に伸展していた日系宗教の活動は、日米開戦と同時に停止することとなった。1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃で開戦すると、その日のうちに前もって作成されていたブラックリストによって、日系人社会の主要な指導者たちは「危険な敵性外国人」として逮捕されていた。この中には各宗教教団の宗教家も数多く含まれており、中にはアメリカ本土に送られ抑留所で終戦まで収容された者もいた。戦時中、ハワイでは戒厳令が敷かれ、日系の宗教活動は停止させられたり、大きく制限されることになった。

7. 都市時代：戦後～1970年代

終戦と同時に抑留所に収容されていた宗教家たちは次々とハワイへ帰還し、停止していた宗教活動の復興に尽力することとなった。日系人の戦争体験は日系社会のアメリカ化を促進し、指導者層の1世から2世への移行の契機となったと言われるが、各教団にとってこの社会変容にどう対応するかが大きな課題となった。仏教各派は比較的復興がスムーズであったときれるが、その中で寺の実権を2世に移行し、英語による布教が促進されるという動きがみられた。一方、神道各派は戦時中に没収された神社や境内の返還が遅れたり、日本での神道司令の影響などもあって神職追放運動が起こるなどその復興の道は厳しいものとなった。

また戦後の復興期における日系宗教の特徴の一つは、大小問わず数多くの新宗教団体がハワイでの活動を開始したことである。さらに華嚴宗や天台宗などがその動きに混じって特異な活動を展開している。開教の年代中で列挙すると次のようになる。()内は開教年。華嚴宗東大寺(1941)、天真道(1951)、天照皇大神宮教(1952)、世界救世教(1953)、立正佼成会(1959)、創価学会(1960)、パーフェクト・リバティー(1963)、真如苑(1970)、天台宗(1973)、本門仏立宗(1973)、辨天宗(1974)、真光文明教団(拠点なし)。これらの教団の中でも、活動拠点としてハワイを重視した天照皇大神宮教と、積極的な活動を展開し非日系人にも教勢を広げて行った創価学会は特筆すべき教団であると考えられる。

8. 1980年代以降

柳川啓一と森岡清美は、調査を実施した1980年頃のハワイの日系宗教の問題をマクロな観点からとらえ、次のようにまとめている。(柳川・森岡1979、12頁)

- ・戦前開教した仏教教団はハワイに定着したかに見えるが、日本語の理解できない世代への真剣な対応を怠ると根底から存立基盤をすくわれかねない。その兆候は、(1)サンデースクールの不振、(2)YBA(仏教青年会)活動の低下、(3)若い世代の聖職志願者の寡少性などに窺われる。
- ・これらの仏教教団はますます死者祭祀に依存する傾向にあり、その兆候は(1)納骨堂の建立、(2)葬儀社との対立的依存関係の推進、などに窺われる。
- ・これに対し、戦前の既成教団に不適應を示す人々は、宗教的な支えを戦後の新興教団に求めている。仏教の難解な教理を大衆にわかりやすく説く教団や、英語による布教を推進する教団が信徒を多く集めている。
- ・これらの新興教団の多国籍化。非日系人をも対象とする布教活動が、とりわけ新宗教の教団にみられ、ハワイではそれほど顕著ではないにしても、カリフォルニアやブラジルなどで目立ってきている。

以上、ハワイにおける日系宗教の歴史を概観して来た。戦前の日本人のハワイへの渡航、そして定住していく動きの中で、仏教や神道は地縁や血縁を基盤として発展してきた。金光教や天理教などの新宗教教団は、同様の基盤で病氣直しなどの特徴をもって既成の教団に割り込む形で参入していった。戦後は、各教団の復興の動きと同時に、新たな教団が布教活動を開始し、非日系人をも対象として進展している様子がみられている。

現在、ハワイ社会は文化的多元化がますます進んでいると言われる。また日系社会も3世や4世の世代になる中で、日系人たちはハワイ社会に完全に順応している反面、日本文化への関心も見受けられる。このような多様性をもつハワイ社会、また日系社会においてどのような活動を展開するかは、日本に起源をもつ宗教の各教団にとって大きな課題である。

[参考文献]

- 井上順孝『海を渡った日本宗教：移民社会の内と外』弘文堂、1985年。
- 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況—ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室、1979年。